

ロボット支援腹腔鏡下根治的前立腺全摘除術 術後皮下気腫に関する後方視的研究

平 出 翔[†] 森 庸 介

IRYO Vol. 75 No. 3 (260-264) 2021

要 旨

序論：腹腔鏡手術は低侵襲手術と認識され、世界的に普及してきた。また腹腔鏡手術をさらに発展させたロボット支援下腹腔鏡手術は本邦で増加傾向にある。腹腔鏡手術の合併症の一つとして皮下気腫があり、皮下気腫にともなう生じる高二酸化炭素血症・縦隔気腫・気胸により、意識障害・気道トラブル・循環動態の変調など、重篤な病態に陥る危険性がある。しかしロボット支援腹腔鏡手術に関して、詳細な術後合併症に関する研究はいまだ不十分であり、皮下気腫の発症率や、皮下気腫の予後への影響は未解明といえる。

目的：本研究はロボット支援腹腔鏡下根治的前立腺全摘除術（robot-assisted laparoscopic radical prostatectomy：RARP）における皮下気腫発症率と、皮下気腫の予後への影響を調査することを目的とした。

方法：後方視的調査を行い、RARPを施行された311人の患者を対象とした。術直後に撮影された胸腹部X線写真を読影し、皮下気腫発症率・皮下気腫発症部位を調査した。また術後在院日数・死亡の有無を後方視的に調査した。

結果：皮下気腫発症率は、286症例（92%）であった。部位別に、『腹部のみ』は127症例（41%）、『腹部および胸部』は113症例（36%）、『腹部および胸部および頸部』は46症例（15%）であった。平均術後在院日数は『皮下気腫なし』は9.8日、『皮下気腫あり（腹部のみ）』は8.7日、『皮下気腫あり（腹部および胸部）』は9.0日、『皮下気腫あり（腹部および胸部および頸部）』は9.1日であり、これらの間に有意な差は認めなかった。術後死亡率は皮下気腫の有無にかかわらず0%であった。結論：RARP術後に高頻度に皮下気腫が認められた。皮下気腫による予後への影響は軽微である可能性が示唆された。

キーワード 皮下気腫, ロボット支援下手術, ロボット支援腹腔鏡下根治的前立腺全摘除術, 術後合併症

はじめに

腹腔鏡手術は開腹手術と比較し、少ない出血量・

低い術後合併症発症率・良好な治療成績・短い術後在院日数が報告¹⁾²⁾されており、一般的に体への負担が少ない低侵襲手術と呼ばれ、早期の社会復帰が

国立病院機構東京医療センター 麻酔科 [†]診療看護師

著者連絡先：平出 翔 国立病院機構東京医療センター 麻酔科 〒152-8902 東京都目黒区東が丘2-5-1

e-mail：simpsons.bic@gmail.com

(2020年7月21日受付，2021年2月19日受理)

Subcutaneous Emphysema Undergoing Robot-assisted Laparoscopic Radical Prostatectomy: A Retrospective Study

Syo Hiraide and Yosuke Mori, NHO Tokyo Medical Center

(Received Jul. 21, 2020, Accepted Feb. 19, 2021)

Key Words：subcutaneous emphysema, robotic surgery, robot-assisted laparoscopic radical prostatectomy, postoperative complication